TADOKU JUNIOR　せかいのなぜなに神話　★★★☆☆ ふつう　495語

Why the Cat always falls upon her Feet

ネコはなぜいつも足から着地する

Florence Holbrook（1902年の本）　原文そのまま　朗読：April6090

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　森でひるねをするよいまほう使いに、大きなヘビがしのびよります。そのとき、木の上には小さなネコがかくれていて……。

Some magicians are cruel, but others are gentle and good to all the creatures of the earth. One of these good magicians was one day traveling in a great forest. The sun rose high in the heavens, and he lay down at the foot of a tree. Soft, green moss grew all about him. The sun shining through the leaves made flecks of light and shadow upon the earth. He heard the song of the bird and the lazy buzz of the wasp. The wind rustled the leafy boughs above him. All the music of the forest lulled him to slumber, and he closed his eyes.

As the magician lay asleep, a great serpent came softly from the thicket. It lifted high its shining crest and saw the man at the foot of the tree. "I will kill him!" it hissed. "I could have eaten that cat last night if he had not called, 'Watch, little cat, watch!' I will kill him, I will kill him!"

Closer and closer the deadly serpent moved. The magician stirred in his sleep. "Watch, little cat, watch!" he said softly. The serpent drew back, but the magician's eyes were shut, and it went closer. It hissed its war-cry. The sleeping magician did not move. The serpent was upon him—no, far up in the high branches of the tree above his head the little cat lay hidden. She had seen the serpent when it came from the thicket.



SHE LEAPED DOWN UPON THE SERPENT

She watched it as it went closer and closer to the sleeping man, and she heard it hiss its war-cry. The little cat's body quivered with anger and with fear, for she was so little and the serpent was so big. "The magician was very good to me," she thought, and she leaped down upon the serpent.

Oh, how angry the serpent was! It hissed, and the flames shot from its eyes. It struck wildly at the brave little cat, but now the cat had no fear. Again and again she leaped upon the serpent's head, and at last the creature lay dead beside the sleeping man whom it had wished to kill.

When the magician awoke, the little cat lay on the earth, and not far away was the dead serpent. He knew at once what the cat had done, and he said, "Little cat, what can I do to show you honor for your brave fight? Your eyes are quick to see, and your ears are quick to hear. You can run very swiftly. I know what I can do for you. You shall be known over the earth as the friend of man, and you shall always have a home in the home of man. And one thing more, little cat: you

leaped from the high tree to kill the deadly serpent, and now as long as you live, you shall leap where you will, and you shall always fall upon your feet."

まほう使いの中にはひどい者もいますが、地上のすべての生き物にやさしくしてくれる、よいまほう使いもいます。ある日、そんなよいまほう使いのひとりが、大きな森の中を旅していました。お日さまが空高くのぼったので、まほう使いは木の根もとに横になりました。まわりにはやわらかい緑のコケが生えていました。葉っぱのあいだからさしこむ日の光が、地面に光とかげのまだらもようをつくっていました。鳥の歌や、ハチのねむそうなブーンという音が聞こえました。頭の上では、葉のしげった枝が風にさらさらとゆれていました。森の音楽にさそわれて、まほう使いはうとうとし、目をとじました。

まほう使いがねむっていると、大きなヘビがしげみからそっと出てきました。ヘビはかがやくとさかを高くもちあげ、木の根もとにいる男を見つけました。「こいつをやっつけてやる！」とヘビはシューッと言いました。「ゆうべ、こいつが『気をつけて、子ネコちゃん、気をつけて！』とさけばなかったら、あのネコを食べられたのに。やっつけてやる、やっつけてやる！」

おそろしいヘビは、じりじりと近づいていきました。まほう使いがねむったまま身動きしました。「気をつけて、子ネコちゃん、気をつけて！」とまほう使いはねごとを言いました。ヘビはあとずさりしましたが、まほう使いの目はとじたままだったので、また近づきました。ヘビはときの声をあげて、シューッと言いました。ねむっているまほう使いは動きません。ヘビがとびかかる――いいえ、まほう使いの頭の上の、高い木の枝に、小さなネコがかくれていたのです。ヘビがしげみから出てきたときから、ネコはヘビを見ていました。

ネコはヘビにとびかかりました

ヘビがねむっている男にじりじり近づくのを見ていましたし、ときの声をあげるのも聞いていました。小さなネコの体は、いかりとこわさでふるえていました。ネコはとても小さく、ヘビはとても大きかったからです。「まほう使いさんはわたしにとてもやさしくしてくれた」とネコは思い、ヘビの上にとびおりました。

ああ、ヘビはなんておこったことでしょう！シューッと言い、目からほのおがとび出しました。ヘビは勇かんな子ネコにめちゃくちゃにかみつこうとしましたが、もうネコはこわくありませんでした。ネコは何度も何度もヘビの頭にとびかかり、とうとうヘビは、やっつけようとしていたねむる男のそばで動かなくなりました。

ネコは何度も何度もヘビの頭にとびかかり、とうとうヘビは、やっつけようとしていたねむる男のそばで死んでしまいました。まほう使いが目をさますと、小さなネコが地面にねそべっていて、すぐそばには死んだヘビがいました。おまえの目はすばやく見つけ、おまえの耳はすばやく聞きつける。走るのもとても速い。そうだ、いいことがある。おまえは世界中で人間の友だちとして知られ、いつでも人間の家に自分の家をもてるようにしよう。それからもう1つ、子ネコちゃん。おまえはおそろしいヘビをやっつけるために高い木からとびおりた。だからこれからは、生きているかぎり、どこへとびおりても、いつも足から着地できるようにしよう。」

たんご と クイズ　ネコはなぜいつも足から着地する

forest 森	tree 木	moss コケ
serpent ヘビ	cat ネコ	branches 枝
eyes 目	feet 足	

Q1 ヘビがまほう使いをおこっていたのはどうして？

① まほう使いがヘビのたまごをとったから　② まほう使いのせいでネコを食べられなかったから

③ まほう使いが巣をこわしたから

Q2 小さなネコはどこにかくれていた？

① 高い木の枝の上　② コケの下　③ まほう使いのマントの中

Q3 まほう使いがネコにあげたおくりものは？

① 長いしっぽ　② 空をとぶはね　③ いつも足から着地できる力

こたえ

Q1 ②　まほう使いが「気をつけて、子ネコちゃん」とさけんだので、ヘビはゆうべネコを食べられなかったのです。

Q2 ①　ネコはまほう使いの頭の上の、高い木の枝にかくれていて、そこからヘビの上にとびおりました。

Q3 ③　高い木からとびおりてヘビをやっつけたネコは、どこへとびおりても足から着地できるようになりました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #22420（Florence Holbrook、1902年）。パブリックドメイン。
挿絵：(1902 edition)（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：April6090（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。